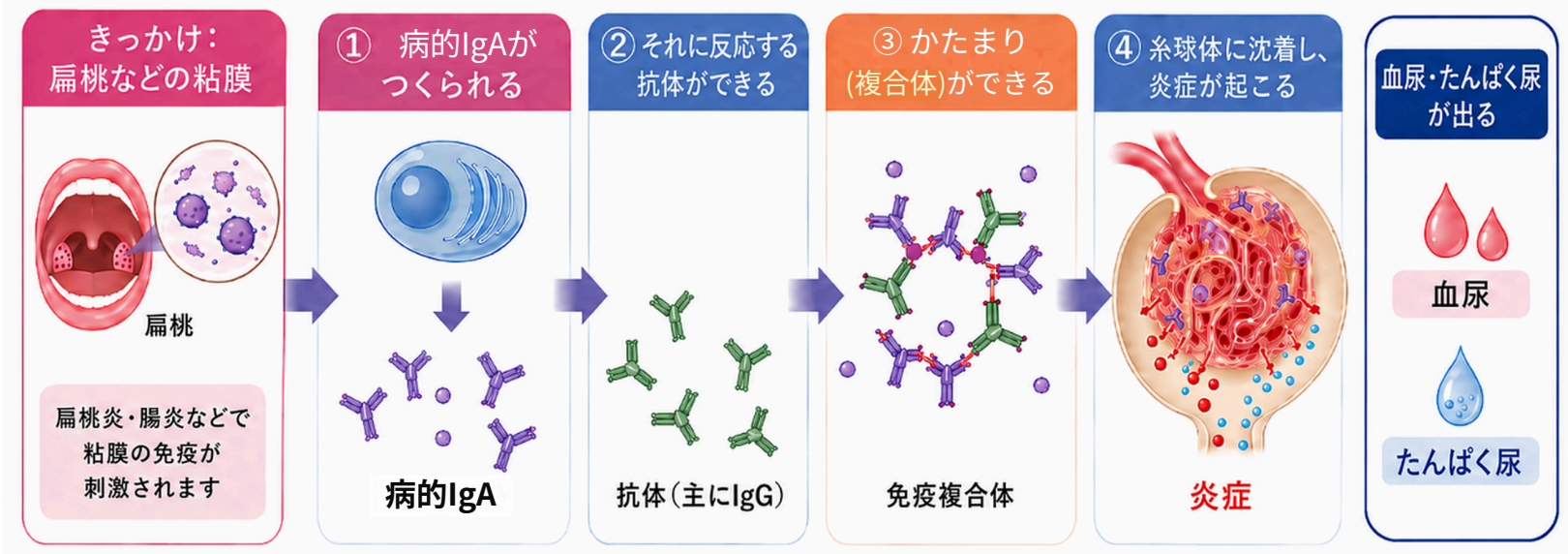
患者さん向け

IgA腎症の原因

扁桃などの粘膜の免疫異常がきっかけで、病的IgAがつくられ、かたまり(複合体)となって糸球体に沈着し、炎症を起こします。



IgA腎症の原因は、まだすべてが明らかになっているわけではありません。しかし現在では、病気が起こるまでに、いくつかの段階があると考えられています。

IgAは、本来は扁桃や腸などの粘膜で、細菌やウイルスから体を守るために働く抗体です。IgA腎症では、このIgAの一部に、「糖鎖」と呼ばれる部分の形に異常があるIgAがつくられます。この病的IgAは、「糖鎖異常IgA1」と呼ばれています。

どのようにこの糖鎖異常IgA1がつくられるのかは、まだ完全にはわかっていません。しかし、扁桃や腸などの粘膜にある免疫のしくみが深く関わっていると考えられています。体の中で病的IgAがつくられると、次に、体はそのIgAを異物のように認識し、それに結びつく別の抗体がつくられることがあります。そして、病的IgAとその抗体が結びつくと、血液の中に「免疫複合体」というかたまりができます。このかたまりが血液の流れに乗って腎臓まで運ばれ、血液をこして尿をつくる糸球体に沈着します。IgA腎症では、このかたまりが特に糸球体の「メサンギウム」と呼ばれる部分に沈着します。すると、そこで免疫反応が起こり、糸球体に炎症が起こります。炎症によって糸球体の細い血管や、血液をろ過するしくみが傷つくと、本来は血液の中にとどまるはずの赤血球やたんぱくが尿に漏れ出します。その結果、血尿やたんぱく尿がみられるようになります。また、かぜや扁桃炎、腸炎などをきっかけに粘膜の免疫が強く刺激されると、病的IgAの産生や、それに続く一連の反応が活発になり、糸球体の炎症が強くなることがあります。IgA腎症で、かぜをひいたときに目で見てわかる血尿が出ることがあるのは、このためと考えられています。

現在では、このような病気の流れを、4つの段階に分けて考える「マルチヒット仮説」[1)] が広く受け入れられており、これらの過程を標的とした治療法が現在行われています。

参考文献

1) Suzuki H et al：The pathophysiology of IgA nephropathy. J Am Soc Nephrol 2011；22：1795–1803